

る。朝、昼、夜に尋ね人ニュースがありラジオのまわりに集まり、耳を傾けた。

私達は、皆さんの食事運搬、また配給品を受け取りに行く。滞在して四日目、列車が出ると通知があり、すぐ出発する。鞍山に着き、社宅を尋ねる。入口に立ち、扉をのぞきお父さんだと言う。

責任者として引率、引揚げ

東京都 曾根 正

昭和二十年八月九日、ソ連軍が侵攻してきたときは、東満州勃利県公署に役付きで勤務していたが、八月十日召集を受け、午前九時の列車で牡丹江に向かった。

午後三時頃、北公園に集結し、点呼を始めたところ、ソ連機が数機牡丹江駅と牡丹江の鉄橋を爆撃した。婦女子、一千五百人が樺林から徒歩で牡丹江に向かっていく。彼らを安全地帯まで引率せよとの命令を受け、私はその責任者を命ぜられた。牡丹江の駅に入り、ホームま

で収容し、同夜貨車でハルビンへ出発した。

八月十五日をハルビン駅、八月十七日早朝新京駅についた。私は全員を室町小学校に連れて行き、ここを収容所とした。淑徳女学校に、ソ連軍の若い隊長の率いる新聞印刷隊が入ってきた。私はロシア語を習得していたので、隊長と仲良くなり、田内（現豊橋在住）が近々ソ連軍により銃殺されるとの連絡を受け、かの隊長に頼み、田内君を救出した。

室町小学校には四回ソ連兵の訪問を受けたが、三回は私が話をして引き取って貰ったが、一回は酔っており、拳銃を振りまわして処置なしなので、隊長にきて貰って追いはらった。

九月初め、先輩から安東にいる家族をつれ戻ってくれと頼まれた。避難民を預かっているからと言って断ったが、安東に発った。

安東についた翌日から列車は運行停止、新京に帰れたのは十一月の末。室町小学校に行ったところ一人もいなかった。越冬のため、市内に分散してしまった。

昭和二十一年一月十九日、東広場にあるソ連軍第一憲

兵隊司令部に捕った。対ソ作戰要員となっていた私はシベリア行きを覚悟した。

当夜八時から十一時半まで将校二十余人いる中で取調べを受けたが、落ちついて応答できた。

隊長は「お前はソ連に好感を持っている。レニングラードの大学に入れてやるからソ連に行かないか、またはスパイをやってくれないか、もし承知すれば、二十一日朝九時釈放する」とのこと。私は後者を選び、釈放されるや、そのまま地下にくぐった。

二十一年四月、ソ連軍が引揚げるや、長春日僑善後連絡所に入り、引揚げ事務所に従事した。

隣組編制の引揚げが完了したところで、八路地区よりの引揚げが始まった。

二十一年九月初め、蒋介石総統の日本人は全員帰国せしめよの命令により、中国軍、特務、警察を動員して満人街にくぐった若い婦女子を満鉄の青年寮の二階強制所に収容した。そして軍と警察が逃亡しないように警備についた。彼女等は理由があつて日本に帰れない人がほとんどである。

八路地区からの引揚げ輸送が終わった後、私は引揚げ相談所の副所長として、金がなくて、隣組の団に入れなかった人、満人街に働きにいつて状況がわからなかった人等を集め、姑娘部隊とあわせて一五三大隊を編制し、中国の徵用解除される人で一五四大隊を編制し、長春最後の引揚げ者、七十七団の編制の準備をしていた。

十月三日、七十七団は出発した。

西の収容所についたが海が荒れ、十日ばかり運航が止まったため、引揚げ者はあふれ、七十七団が入った収容所は屋根、窓、戸がない建物、アンペラの上にアンペラをかぶって寝るありさま。輸送船秋の輸送隊長として、二十一年十月十九日、ぶじ博多に上陸。ようやく故国の土を踏んだ。

産婆として生きぬく

大阪府 富岡 次子

昭和十五年十月、主人は当時の国策にしたがい、北辺